木幡ぎつね

木幡ぎつね

御めのと思ひ思ひに云々ー思ひに乳母のつてを求めて

中頃の事にやありけん、山城の國木幡の里に年を經て久しき狐あり。稻荷の明神の御使者たるによつて、何事も心にまかせずといふ事なし。殊には男子、女子、そのかず數多もち給ふ。どれ〳〵も智慧、才覺、藝能いふばかりなく、世にならびなく聞えありて、とり〴〵にさいはひ給ふ中にも、弟姫にあたらせ給ふはきしゆごぜんとぞ申しける。いづれよりも殊にすぐれて、容顏美麗にうつくしく、心ざま竝びなく侍りて、春は花のもとにて日をくらし、秋は隈なき月かげに心をすまし、詩歌、管絃に暗からず。聞きつたへし人々は、心をかけずといふことなし。御めのと思ひ〳〵に緣をとり、我も〳〵とかずの文をつかはし、心をつくすと申せども、行く水にかずかく如し、うち靡くけしきもましまさず。姫君うき世に長らへば、いかならん殿上人か、關白殿下などの北の方ともいはれなん、なみ〳〵ならん住居は思ひもよらず。それさなき物ならば、電光朝露夢幻

の世の中に、心をとめて何かせん、いかなる深山の奥にも引き籠り、浮世を厭ひ、偏に後世を願ひ侍らばやと思ひ、あかしくらし給ふほどに、十六歳にぞなり給ふ。父母御覧じて多き子どもの中にも、此きしゆごぜんは世にすぐれ見えたまふ、いかなる御かたさまをも婿にとり、心安きさまをも見ばやと思ひて、さま〴〵教訓したまふ。

さてまた爰に三條大納言殿とておはします。其御子に三位の中將殿とて、容顔美麗にして、まことに昔の光源氏、在原の中將殿と聞えしも、是には勝るべからず、高きも賤しきも心を惑はしける程に、父大納言殿に仰せあはせて、さるかたさまより御使ありしかども、中將殿御心にそむ色もましまさず、いかならん賤の女の子なりとも、そのかたち勝れたらん人ならばと思しめし、常は詩歌管絃にのみ心をすまし給ふ。頃は三月下旬の事なるに、花園にたち出で給ひ、散りなん花を御覧じて、業平のけふの今宵にと詠みけるも、かゝる折にやと眺め給ふをりふし、かのきしゆごぜん稲荷の山より見おろして、うつくしの中將殿や、われ人間と生れなば、かゝる人にこそ逢ひ馴るべきに、いかなるかいぎやうによりて、かやうの身とは生れけるぞや、淺ましさよと思ひけるが、よし〳〵ひとまづ人間のかたちと化け、一旦の契をも結びさふらではと思しめし、めのとの少納言を近つけ

けふのこよひに―伊勢物語「花にあかぬ歎きはいつもせしかどもけふの今宵に似る時はなし」かいぎやう―戒行

ていかに聞き給へ、われ思ふ子細あり、いざや都に上りさふらふべし、さりながら此姿にて上りなば、人目もいかゞさふらはん、十二ひとへ袴きせてたべ。めのと此由をきゝ、今程都には鷹犬などと申して、家々ごとに多ければ、道の程も御大事にてさふらふぞや、そのうへ御父みやうぶどの、御二所さまきこしめし、とくわらはが仕業とのたまはん事疑なし、思しめしとまり候へと申しける。姫君きこしめし、いかにとゞめ給ふとも、われ思ふ子細ありて、思ひ立ちぬる事なれば、いかにとゞめ給ふとも止るべきにてあらずとて、美しく化けなしてこそ出でにけり。さる程に中將殿は此姫君を御覽じて、夢かうつゝか、覺束なしと御覽じけるに、そのかたち言ふばかりなく　まことに玄宗皇帝の楊貴妃、漢の武帝の世なりせば李夫人かと思ふべし、さて我朝には小野の良實が娘小野の小町などといふとも、是程にありつらん、いかさまいづくの人にてもあれ、よき便ぞとおぼしめし、めのとと覺しき女房に、これはいづくよりいづかたへ通らせ給ふ人やらんと、御尋ねさせたまふ。めのと嬉しくて申しけるやうは、これはさる人の姫君にてましますが、繼母にいひ隔てられさせ給ひ、父の不興を蒙りたまひ、これを菩提の種として、いかならん山寺にも引きこもり給はんとの御事にて候ふが、是をはじめの旅なれば、道ふみ迷

とくわらはが云云―早くも妾が所爲なりと

ひて、是までまゐりて候ふが、憚おほく候へども、一夜の御宿を仰せ付けられ候ひてたび給へと、さもあり〳〵と申しければ、中將嬉しくおほしめし、此年月色ごのみし侍りしかば、かやうの人に逢はんとの事にてこそありつらん、よし〳〵誰にてもあれ、これも前世の宿緣とおぼしめし、こなたへ入らせたまへとて、わが御館へ伴ひ、御めのとに春日の局に仰せつけ、さま〴〵に御もてなしかしづき給ふ事いふばかりは無かりけり。

さもあり〳〵と―さもありげに

御めのとに―に文字不用なるべし

其後おの〳〵休みたまへば、いとど中將殿のあこがれさせ給へば、姫君の御枕に寄りそひて、かやうのまより、二世ならぬさき〴〵の奇緣とこそ思ひ侍れ、何と御心深くのたまふとも、この内をばいだし申すまじとて、さま〴〵御言葉をつくし給ふ。もとより姫はたくみたる事なれば、嬉しさかぎりなし。さりながらいと恥しげなる風情して、うち靡くけしきもなくて居給ひけり。夜もやう〳〵更けければ、鴛鴦のふすまのしたにたはぶれけり。たがひに御心ざし淺からず、生きては偕老の契とおぼしめし、よるの明けやすき夜半にて、程なく烏も音づれ、寺々の鐘もはや明けぬと響きけり。中將殿は餘りなごり惜しさのあまりに、一首かくなん、

りの衍か

かやうのまより―かのやうたよ

むつごともまだ盡きせぬにいかばかり明けぬとつぐる烏の音ぞうき

姫君かへし、

思ひきやこよひはじめの旅寝して鳥のなく音を歎くべしとは

かやうにさま〴〵ながめさせ給ひ、よるも終夜ひるはひめもすにたはぶれて、明かし暮らし給ふ程に、月日に關守あらざれば、水無月の頃かの姫君惱み給ふ。中將殿御覽じて、心苦しき有樣かな、いかならん事ぞやとて、さま〴〵御祈ども言ふばかりなし。此事をのみ歎かせ給へば、たゞならず見えたまふ。中將殿もめのとも御よろこびにて、その年も過ぎあらたま如月もたち、やよひと申すには、さもうつくしき若君をまうけ給ふ。中將殿御覽じて、たぐひなき御事に思ひ給ふ。御めのと數々、その外おの〴〵參り、いつきかしづき給ふこと限りなし。かくて日にそへて、光さしたまふ心ちして、うつくしく生ひたち給ふ。大納言殿の北の御方もよそ〴〵ながら聞召し、中將殿は何とてかやうの御事、つゝませ給ふぞや、其身はいかやうの人にてもあれ、中將殿の御覽ぜん人、そのうへ美しき若君も出來させ給へば、我々いかでおろかならぬ、姫君にも對面して、諸共にかしづきまゐらせんと思召し、中將殿へこま〴〵と仰せられければ、なのめならずに喜び給ひ、是よりかくと申し入れたく候へども、はゞかりに存じ候へばとて、姫君にかく

おろかならぬ―おろかならんの誤

との給へば、憚りながらかやうにの給ふへはとて、とりぐ〳〵の御裝束などこしらへて、吉日御とり御見參ありけり。

大納言殿北の方御覽じて、かゝる美しき女房も、世にはありけるよ、いかならぬ宮腹の姫君といふとも、かゝる姿はあるまじ、中將殿の思ひ給ふもことわりとぞ思しける。かくて思ふ事なくて、月日をおくり給ふ程に、若君三歳にならせ給ふほどに、御内の人々も、此若君の御機嫌よきやうにとたしなみ、いろ〳〵御もてなし、御あそび物など奉る。あるとき中將殿の御めのと中務のもとよりとて、世にたぐひなき逸物ととてうつくしき犬を進上いたしけり。少納言此由をきゝて、身の毛もよだつばかりにて、急ぎ姫君の御前にまゐりて申しけるは、不思議の御大事出來さふらふぞや、この犬かくてさふらはずは、大事これに過ぎ候はずとて、涙にむせふばかりなり。姫君きこしめし、まことに是こそ限りなれ、この内いづるより外の事あらじ、中將殿、若君の御なごりいかゞすべきとて涙せきあへず。やゝありて仰せけるは、たとひ千年萬年をふるとも、なごりは盡くる事あらじ　ひまを窺ひ立ちいで、是を菩提の種として、世を儚ひなんことは、いと易き事なれども、中將殿さこそは歎かせ給はんずらん、若君のなごり、かへすぐ〳〵も悲しけれども、

いかならぬ―いかならんの訛

かくてさふらはずは―かくてさふらはゞの誤か、或はかくてさぶらはずはの意か

是非叶はぬ事なればとて、涙にむせび給ひけり。さるほどに中將殿みかどより御召ありて、七日の管絃（くわんげん）とありしかば、姫君にのたまふやう、われ笛の役とて、内裏（だいり）へまゐり候ふ　留守の程よくよく、若君なぐさめ給ふべしとて出でさせ給ふ。姫君御覽じて、これぞ限りなる、よそ〳〵ながらは見まゐらせ候ふとも、詞をかはし申さんことは、今ばかりなり。扨そののち少納言をちかづけて、これこそよきひまよ、いざ出で候はんとて、少納言御裝束など取りひそめければ、姫君御覽じて、涙のひまよりかくぞよみ給ふ。

わかれても又もあふせのあるならば涙の淵に身をばしづめじ

かやうに詠じ給ひて、少納言もろともに都をい

歸らぬまでは—歸らんまではの誤
まほらせ—守らせ

で、稲荷の明神さま、われふるさとへ歸らぬまでは、難なくまほらせ給へとて、涙と共に出でたまふ心のうちぞあはれなる。深草を通るとて、都の方を見送りて、たゞずみたまへば、折ふし荻の葉に露しめぐ〳〵とうち置きて、いとものあはれに、

　おもひいづる身は深草の荻の葉の露にしをるゝわが袂かな

かやうにうちながめ、やう〳〵行く程に、古塚にこそ著きにけれ。きしゆごぜんの歸らせ給ふと、はした狐のいひければ、父母きゝもあへず、こはいかにとて驅けいで、此三年が程みえたまはねば、いかならん獵人などにも行き遇ひ給ひて、雁股の一筋もあたり給ふらんか、または鷹犬などにもくはれさせ給ふらんと、さま〴〵歎きくらせしに、これは夢かや、うつゝかや、嬉しき中にも涙にて、袂にすがりつき、あらめづらしや、こん〳〵、いづくにおはせしぞ、こん〳〵と、のみ言ひければ、めのと少納言はじめをはりの事どもを、こま〴〵と語りけり。父母きゝて、さてはかやうに近きあたりに住みながらへておはせしに、今まで知らせざりし少納言こそ恨しけれとて、一門眷屬さし集りて、よろこびの酒盛はことわりとぞ聞えけり。

かやうにめでたき事限りなし。中にもきしゆごぜんは、たゞ若君、中將殿の御事のみ戀

われこそ―汝こそ

しくて、さら〳〵浮世に御心もとまらず、様をかへさせ、菩提の道に入らんと案じ、又こはたの塚を立ちいでて、嵯峨野のかたへ分け入りて、庵室を結び、みどりの髪を剃りおとし、この世は假の宿、電光朝露ゆめまぼろしの事なれば、今此時生死輪廻を免れ、未來は必ず一つはちすの臺に生れんと願はれけり。さても都には、中將殿内裏より御いとま申して、わが御所に歸り給ふが、御前も少納言も見えたまはず、若君は乳母の膝によりふして、母上のうせ給ひし御事、深く歎きたまひけり。中將殿はいかなる御事ぞやと、御歎きなか〳〵たとへん方もなし。常に住み給ひし所御覽ずれば、さま〴〵の御名殘をしき御事、かきつくし給ふ御事かぎりなし。われこそ緣つくるとも、若君さへ生ひたちたまはど、何の怨にか出でたまふぞと、御歎きかぎりなし。春日の御局、若君の御乳の人に事の子細をたづね給へども、何とも知りまゐらせ候はず、若君さまへ犬まゐり候てより、少納言殿ことのほか顔の色かはり、世に怨しげにのたまひしよりほかは、見まゐらせず候ふ、何事も候はず候ふと申しけり。中將殿きこしめし、よし〳〵その身は何にてもあれ、せめて此若七歳までは、などか一つにあらざらんと、御歎きは申すばかりなし。しかるに其後こゝかしこより、北の方むかへさせ給へと申しけれども、其色もましまさず。

只この御別れのみ歎かせ給ひけり。かやうにして年月を送り給ふほどに、若君はとりどり繁昌させたまひ、すゑ繁昌と聞え給ふ。さるほどに、かの庵室には都の事のみ戀しくてすごし給ふ。さりながら若君の御榮えよそ〳〵ながら見給ひて、嬉しさかぎりなし。若君はいよ〳〵峯に上り、花を折り、谷の水をむすび、少納言もろともに彌陀の名號唱へ、行ひすまし給ひけり。かゝる畜類だにも、後生菩提の道を願ふならひなり、いはんや人間としてなどか此道をなげかざらん。かやうにやさしき事なれば、書きつたへ申すなり。